

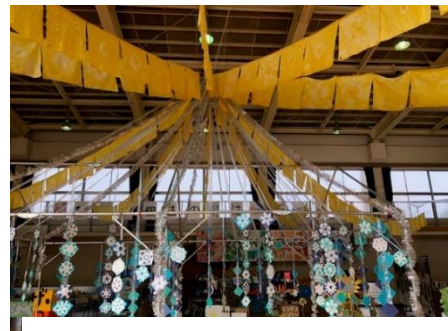
「生きる力を育む造形活動」



前 津島市立高台寺小学校校長
愛知教育大学 非常勤講師
浅尾知子

1. はじめに

「新型コロナウイルス感染症」の感染拡大により、停滞していた教育現場における ICT は「GIGA スクール構想」のもと、急速に進化を遂げ、子どもたちの学校生活は一変しました。現在新型コロナウイルスは、通常の医療体制での対応となりましたが、それでもコロナ禍を経て、教育現場は多くのことが変容しました。私は、退職後の今、造形活動を通して、子どもたちのためにできること、造形活動の不易と流行について、試行錯誤を繰り返しながら模索しています。今回のメルマガ執筆を通して、今までの活動を振り返ることで、今後の活動の方向性を再考するきっかけにできればと思っております。退職前の勤務校において教職員とともに手探りで実践してきた内容です。今後の方向性等につきましてご教示いただけますと幸いです。



【作品展の様子 (一部抜粋)】

2. 「主体的・対話的で深い学び」を目指した造形活動

～あいちトリエンナーレ 2019 ラーニングプログラム～

アートとの出会いを通して子どもたちの感性や創造に働きかける「アーティスト派遣事業」に、全校児童が参加をし、アーティストの日比野克彦氏、遠藤幹子氏らと共に、全校での段ボールを使った造形活動に取り組みました。

○ 活動の様子

プログラムのしかけとして、日比野氏を「親方」に5・6年生を「棟梁」と位置付けました。5・6年生は3回の「段ボール研究会」の実践を通して、スタッフから、段ボールの特性や扱い方の知識、活用の技能（総称して『技』）を学びました。5・6年生の児童は、この活動を通して、段ボールの強度を高め、丈夫に仕上げる方法を見つけ出しました。

5・6年生の技が生かされる全校での制作活動では、日比野親方から「巨人を作ろう」という提案がありました。この日、棟梁となった5・6年生は、ふれあい班で決めたテーマに沿って、段ボール研究会で習得した『技』を駆使しながら、リーダーシップを発揮して作品制作に取り組みました。

制作過程で、班ごとに話し合いを重ね、高学年児童が低学年児童の意見を取り入れながら、役割を分担する姿が見られました。高学年児童の感想からは、活動を通して「段ボール」に対する意識の変容が綴られていました。特に段ボールは、使い方によって、災害時の避難所等で生かせるのではないかと気づき、防災学習へと思いをつなぐ児童の姿も見られました。

この活動には、数多くの段ボールが必要となりました。大きな段ボールの運搬は、保護者の力を借りましたが、収集活動の中心は児童達でした。児童は、目的に合った段ボールを探



【全校での活動の様子】

して準備し、制作に活用するなど、主体的に活動していました。造形活動での学びが、生きる力を育む一助となりました。

その後開催した「高台寺小作品展」では、積極的に作品作りに取り組む児童の様子を写した写真や、皆で取り組んだ作品を展示しました。作品展を鑑賞した保護者や地域の方からも、賞賛の言葉をいただきました。

3. 一人一人の思いが広がる「わくわくする学校」を目指した造形活動

コロナ禍で行動が制限されている状況を「ピンチはチャンス」ととらえ、できないからやらないではなく「工夫してできることをやろう」と、皆で取り組んできました。

3-1 本物に触れる体験 ～スクールミュージアム～

スクールミュージアムは、校内の一部を美術館に見立て、図画工作科及び他教科と関連した作家作品を展示し、日常空間を非日常空間へいざなうという取組です。ICT機器を駆使し、バーチャル体験による美術館見学も可能となった現代ですが、小学生にとっては、本物の作品に触れることが大切だと考え、年に1度、継続して実践してきました。

スクールミュージアムでは、主に創作活動を継続してみえる教育関係者（大学教授等）にギャラリートークと作品展示を依頼し開催してきました。

展示作品は、ガラス、陶芸、テンペラ画、日本画、木工、染色など多岐に渡っています。

初めて目にする様々な作品は、児童の興味関心を喚起し、新たな感性を引き出してくれます。

作家がギャラリートークで語る作品への熱い思いは、児童の胸に強く響きます。児童の感想には、作者の苦労や工夫を聞き、作品のすばらしさが一層伝わったと記されていました。



【作家から制作秘話や解説を聞く児童】

3-2 「わくわくする学校」に変身させよう

コロナ禍において、まず6年生が、校内が楽しくなる作品作りに取り組みました。作品は、校内の特別教室や廊下等に掲示し、全校児童の関心を集めました。

「ここから見ると手をつないでいるように見えるよ」



【わくわくする学校 6年生作品①】

その後、ふれあい班(異学年集団)で6年生の作品を鑑賞する「わくわくツアー」を休み時間を利用して実施しました。ツアー当日は、「ここから見ると、作品がつながるよ」という投げかけに、目を丸くしながら、興味をもって鑑賞する低学年児童の姿が見られました。



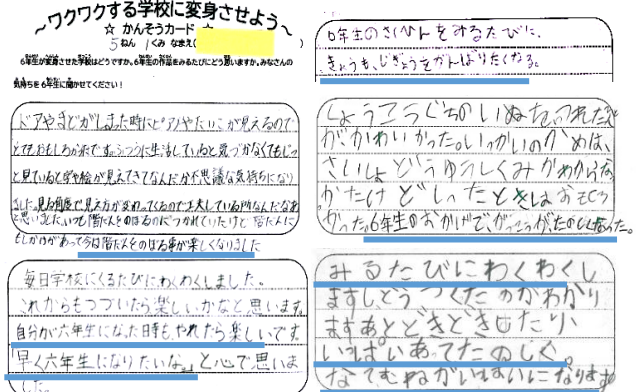
別々の場所に貼ってあるゴリラとタワーが、ある場所から見るとつながり、まるでゴリラがタワーをのぼっているように見えます！



【わくわくする学校 6年生作品②】

鑑賞後には「学校に来るたびにわくわくする」「階段を上ることが楽しい」「今日も授業をがんばりたくなる」といった感想が寄せられ、6年生の作品が、わくわくする学校の雰囲気づくりにとても役立っていることが

わかりました。6年生に倣って、他学年も校内のあちらこちらにわくわくするしかけや作品を掲示し、学校全体で楽しい学校づくりに取り組みました。



【1～5年生の感想カード】

3-3 高台寺ミュージアム

「わくわくする学校づくり」の活動を発展させて全校で新たな活動「高台寺ミュージアム」に取り組むこととしました。校内のいたるところに展示した学年ごとの作品を、ふれあい班で鑑賞しながら、グループ内で、自分の作品のギャラリートークを行う活動です。



【ギャラリートークの様子】

少人数のふれあい班で鑑賞することで、どの児童も思いを伝え合うことができました。鑑賞後に書かれた感想カードには、「(部屋に入った瞬間) 違う世界に入ったよう」「みんなと仲良くなった」「どの作品もすごい！自分も作ってみたい」などの素直な思いが綴られていました。活動を通して、仲間と交流できたことの嬉しさや楽しさが伝わってきました。

4. おわりに

造形活動を通して、お互いの良さを認め合いながら、夢中になってよりよいものを追求する児童の姿が見られるようになってきました。ある教職員の「図画工作(造形活動)がこんなに楽しいものだとは初めて思いました」という言葉に、造形活動の原点を見た思いがしました。まず、教職員自身が楽しいと思えなくては、児童にはその楽しさは伝わりません。ICTの活用が進む中、アナログな活動が減少している場面を見かけることもあります。子どもたちには、ICTの効果的な活用の仕方を取り入れつつ、時には手足や指先を使ったアナログな活動を通して、つくる喜び、つくり出す楽しさを実感してほしいと思います。今後も生活の様々な場面において、造形活動で得た学びを生かし「生きる力」を育み、自らの生活を楽しく豊かにしようとする子どもたちの姿を目指した活動に力を注いでいきたいと思います。